



東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター

(多文化コミュニティ教育支援室)

1. はじめに

『あなたと出会う国あてゲーム』

これは、大学生である私達が、小学校での国際理解教育教材として作成したものです。

さて、“国際理解教育”と聞いて、あなたはどんなことをイメージしますか？

私達が小学校6年生社会科の国際理解教育教材として作った、この『あなたと出会う国あてゲーム』。作成するにあたって大切にしたいことは、名前にもあるとおり、「人と出会う、あなたと出会う」ということです。「〇〇さんのことをもっと知りたい」という、その人を理解したい、という気持ちをもつことが、国際理解教育を行うにあたって大切なことなのではないかと考えました。このような気持ちをもつことは、国際理解教育で、とある国について調べる時はもちろんのこと、また、普段の生活においても大事なことだと思います。

今、となりにいる「あなた」と出会うこと、そんな「あなた」との出会いを大切にすること。そこから、身近なところから世界は広がっていくのだと思います。

そんな思いから作られた、この『あなたと出会う国あてゲーム』。使う教材やビデオは、全て学生の手作りです。至らない点も多々ありますが、その分、この教材のもつこれからの可能性は大きいのではないかと感じています。

この教材を通して、ひとりでも多くの子ども達に「出会い」を届けることが出来たら、「出会う」ことの楽しさ、わくわく感を届けることが出来たら、と思います。その出会いを通して、子ども達の世界が広がっていきますように。

さあ！ぜひこの『あなたと出会う国あてゲーム』で、
一緒に「出会い」を通じた国際理解、してみませんか？
わくわくどきどき新発見、間違いなしです。

東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター
文化コミュニティ教育支援室
2007年度国際理解教育
川崎市立東柿生小学校6年生班
「あなたと出会う国あてゲーム」チーム
東奈津美・阿部靖子・周 首能・柴本智代

2. ねらい

この教材は、つぎのようなことを「ねらい」としています。

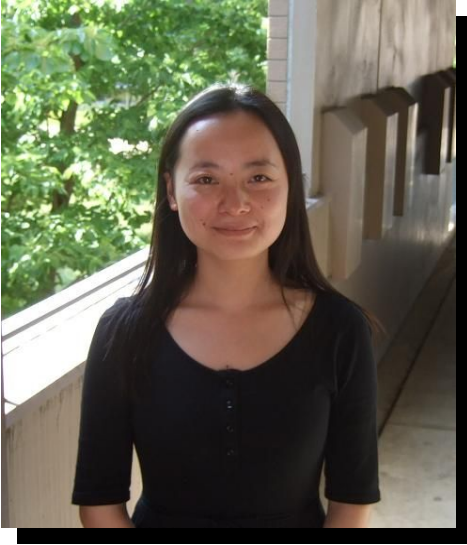
- ・ 世界のさまざまな地域から日本に来ている留学生の話を読み、その出会いを通してさまざまな文化や、それを背景にもつ人への興味を持つことができる。
- ・ 日本とつながりのある国々（ここでは、アメリカ・ブラジル・中国・韓国）について、人との出会いを通じた理解を深めることができる。その出会いがその人の国に対する興味へとつながり、またさらには、その後の調べ学習へとつながる。
- ・ 「〇〇の国の人こんな人」というようなことは言えないということ、それぞれの国にいろいろな人がいて、いろいろな考え方を持っていることに子ども達が気付く。
- ・ 「人」との「出会い」の大切さを伝える。

3. 対象

小学校6年生（以上）

基本的には、小学6年生の社会科「日本とつながりの深い国々」（教育出版）、又はそれに相当する単元を使用することを想定していますが、それ以上の学年で使用することも、また、大人と子どもと一緒に楽しむことも可能です。

4. 教材



写真カード

- ・留学生の写真カードです。
- ・写真は日本で撮ったもので、それぞれの人の服装と出身国は関係ありません（半袖→暑い国といった関連はありません）。

ホドリーゴさん

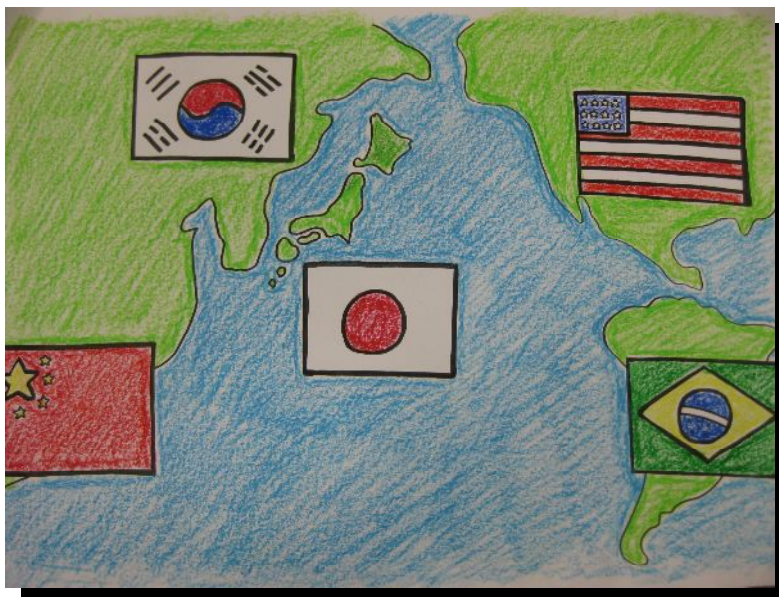
お母さんが学校と家の間を送り迎えしてくれました。
家に帰ると、テレビを見たり、宿題をしたりしていました。
おじいさんとおばあさんが日本語を話していたので、それを聞いて、自分も日本語の勉強を始めました。

情報カード

- ・留学生の自己紹介カードです。
- ・インタビューで聞いた事柄のうち、「子どもの頃の思い出」「日本語を勉強したきっかけ」が書かれています。

台紙

- ・アメリカ、ブラジル、中国、韓国の国旗が描いてあります。
- ・ゲームでは、この台紙を机の上に広げ、それぞれの国旗の上に、「写真カード」と「情報カード」を組み合わせて置いていきます。
- ・地図と国旗は、デフォルメして描かれているので、あとで正確な地図を見て、それぞれの国の位置や形、大きさ、国旗のデザインなどを確認するようにしてください。



5. 授業の流れ

1) この国、どんな国？

| 時間 (分) | 活動内容 | 予想される反応など | 教材等 |
|-----------|---|--|-----|
| 10 | <p>① 中国・韓国・アメリカ・ブラジルについて、それぞれのイメージ（「中国と聞いて思い浮かぶもの」など）を子どもたちに聞き、出てきたものをすべて黒板に書き出す。</p> <p>② みんながいろいろなイメージを持っていることや、国によって、思い浮かぶものが多い・少ないといった差があることを確認する。</p> <p><u>留意点</u> ここでは、子ども達がどのようなイメージを持っているのかを確認することがねらいなので、教師が教える必要はない。また、一つひとつの「イメージ」について、それが合っているかどうかを問う必要もない（仮に「偏見」が含まれていたとしても、そのまま黒板に書いておく）。</p> <p>但し、子どもたちの中に、その国につながりを持つ子が含まれる場合には、「偏見」に満ちた発言によってその子が傷つけられたりしないよう、注意が必要である。</p> <p><u>応用</u> 時間がゆるせば、それぞれの国の「人」についても、どのようなイメージを持っているか、話してみるとよい（アメリカ人→体が大きい、ブラジル人→サッカーが得意、陽気 など）。</p> | <p>中国</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ラーメン ・餃子 ・万里の長城 ・人が多い <p>韓国</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キムチ ・焼肉 ・ハングル（文字） <p>アメリカ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マクドナルド ・野球 ・自由の女神 ・広い <p>ブラジル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サッカー ・サンバ ・アマゾン ・暑い ・地球の裏側 ・貧しい | |



2) どこの人かな？

| 時間 (分) | 活動内容 | 予想される反応など | 教材等 |
|-----------|--|--|---------------------------------------|
| 15 | <p>① 5～6人ずつに分かれてグループをつくり、机を合わせる。</p> <p>② 「写真カード」「情報カード」「世界地図」(台紙)を見せて、ゲームのルールを説明する</p> <p>「これから『国当てゲーム』を始めます。これから配るのは、このゲームで使う「写真カード」「情報カード」と世界地図です。」</p> <p>「写真カードの人達は、日本の大学で勉強している留学生です。」</p> <p>「情報カードには、その人に関する情報が書いてあります。」</p> <p>「写真カードには日本人も2人含まれています。」</p> <p>「日本人の分の情報カードはありません。」</p> <p>「写真は日本で撮ったので、留学生の服装と出身国とは関係ありません(半袖を着ているからといって、暑い国の人だとは限りません)。」</p> <p>「写真カードと情報カードを組み合わせて、その人の出身国だと思う国の国旗の上に置いてください。」</p> <p>「1つの国に2人あてはまることもあります。」</p> <p>③ 写真カード、情報カード、世界地図(台紙)を配る。</p> <p>④ ゲームを始める。(6分程度)</p> <p>「では、始めてください。」</p> <p>⑤ 結果を聞く(どの写真とどのカードを組み合わせ、どの国に置いたか、なぜそのように考えたのか)</p> <p>※すべて聞くと時間がかかるので、2つ～3つだけ。</p> <p>⑥ ゲームをやってみて、どのように感じたか、感想を聞く。</p> <p><u>留意点</u></p> <p>いちばん大切なのは、子ども達が、自分が感じたことを、そのまま素直に表現すること。自由に発言できるような雰囲気づくりを心がけたい。ゲーム中、各グループを見て回り、子ども達が思わず口にすることばを拾って(書き留めて)おき、「こんなことも言っていたね」と紹介するのもよい。</p> | <p>「難しい」</p> <p>「顔を見ても、どこの国の人か分からない」</p> <p>「日本人は、ぜったい、この二人だと思う」</p> <p>など</p> | <p>写真カード</p> <p>情報カード</p> <p>世界地図</p> |



3) 留学生のお話を聞いてみよう (インタビュー映像で答え合わせ)

| 時間 (分) | 活動内容 | 予想される反応など | 教材等 |
|-----------|---|-----------|-------------|
| 15 | <p>① ビデオ映像について説明する</p> <p>「これから、答え合わせをします。留学生にインタビューをした映像を流します。留学生に質問したのは、子どもの頃の思い出、日本語を勉強した理由です。最後に皆さんへのメッセージもあります。」</p> <p>「では、見てみましょう。」</p> <p>② ビデオを上映する</p> <p><u>留意点</u> 映像を見る際、時間が長くなって子ども達が飽きてしまうようなら、1人ずつ区切って、その都度「答え合わせ」をしながら進めるとよい。ただし、グループで出した「答え」が合っていたかどうかにはあまりこだわらない方がよい。それよりも、「どこの国の人か、簡単にはわからない」ことを実感してもらうことが大切。</p> | | DVD 上映機器 |

4) ふりかえり

| 時間 (分) | 活動内容 | 予想される反応など | 教材等 |
|-----------|--|--|-----|
| 10 | <p>① インタビュー映像を見た後、各グループで感想を話し合う（人や国に対する自分が持っていたイメージが変わったか、など）</p> <p>② 各グループで出た感想を全体で共有する。</p> <p><u>留意点</u> 最初に黒板に書き出した「イメージ」の間違い（偏見）に気づくこともあるかもしれないが、だからといって、一つひとつの「イメージ」が合っていたかどうかを確認する必要はない。ビデオに出てくる数人の留学生の話だけで、その国について正確に分かるわけではない。ここでは、「〇〇国はこんな国などと簡単には言えない」「1つの国の中にもいろいろな人がいる」「日系人のように、日本とつながりを持つ外国人もいる」ということが理解できればよい。</p> <p><u>応用</u> 最初に黒板に書き出したそれぞれの「イメージ」について、なぜ、そのようなイメージを持つようになったのかについて話してみると、自分たちの生活の中でのメディア（特にテレビ）の影響について考えることもできる。</p> | <p>「ブラジルの人（日系人）が日本語が上手でびっくりした」</p> <p>「アメリカ人は～だと思っていたけど、イメージと違って驚いた」</p> <p>など</p> | |

6. 伝えたいこと

『あなたと出会う国あてゲーム』。私達がこの教材を通して伝えたいこと。

1点目は、「人」との出会いを大切に、という気持ちの大切さです。社会科で外国の国について調べる時、いくら日本とつながりのある国々であったとしても、それは“日本”と“その国”のつながりであって、“子ども達＝ぼく”と“あなた”の直接的なつながりではありません。「人、あなた」との出会いを大切にしてほしい。そこから始まります。そんな出会いは、自分の世界が新たに広がる第一歩になる。世界の国々を、「遠い〇〇国」と考えるのではなく、「私の出会った〇〇さんのいる国」として考えることが出来る。そんな出会いのわくわく感を、子ども達に伝えたい、そう思います。この教材を作成するにあたって、多くの出会いを新たに経験することが出来、そこで改めて、出会うことのわくわく感を実感しました。「はじめに」にも書きましたが、出会いを大切にすることは、国際理解教育においてのみ大切にされていることではなく、何気なく過ごしている普段の生活においても同じことが言えるのではないのでしょうか。

2点目は、「〇〇国の人こんな人」というようには言えない、ということ、いろいろな人がいて、みんなそれぞれいろいろな考え方を持っている、ということです。考え方は国によって違うのではなくて、ひとりひとり違っている、それで当たり前、ということに気付くことが出来たら、と思います。また、留学生の子どもの頃の思い出話を聞いて、「ぼく／わたしと同じだ！」という部分を見つけ、変わらない部分もあるんだ、という視点ももってほしいです。

大学生による国際理解教育について

東京外国語大学の学生たちが、学内にある「多文化コミュニティ教育支援室」と名付けられた部屋を拠点に、国際理解教育のボランティア活動に取り組んでいます。自分たちが作った国際理解教育のプログラムを、小中学校に、いわば「出前」する活動です。2007年度は4つ、2008年度は7つの学校で実践を行いました。

学生たちは数人でチームを組み、昼休みや授業の空き時間にミーティングを重ね、みんなでアイデアを出し合いながら授業案を練っていきます。そして本番、学生たちは、少々緊張気味ながらも、子どもたちの興味をうまく引き出し、決して飽きさせない授業を展開します。世界のさまざまな文化について、あるいは国際問題について、ときに自らの実体験にもとづいた話も織り交ぜながら授業を進めていきます。子どもたちも、普段の授業ではあまり見られないような生き生きとした表情を見せます。

そうした活動の様子を見ながら感じるの、日頃から外国の言葉や文化を学び、他者とのコミュニケーションについて体験的に考えている、東京外国語大学の学生たちの感覚の鋭さ、確かさです。その感覚をベースに、何人もの学生たちが知恵を出し合ってつくる国際理解の授業案は、とても刺激的で面白く、いろいろな課題提起を含んでいます。

この教材は、そんな学生たちのセンスの良さやチームワーク、行動力の中から生まれたものです。

この教材が、いろいろなところで活用され、子ども達の感性に訴える参加型の国際理解教育の実践が広がっていくことを願っています。

発行

東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター(多文化コミュニティ教育支援室)

〒183-8534

東京都府中市朝日町 3-11-1

TEL 042-330-5428

FAX 042-330-5456

URL http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer_mclsc/ja/

メール t-shien@tufc.ac.jp